



## ジャンリス夫人の生涯とその思想

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 京子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002845">https://doi.org/10.24729/00002845</a>

## ジャンリス夫人の生涯とその思想

村田京子\*

### はじめに

19世紀初頭、フランスの文壇において二人の女性作家が名を馳せていた。一人はフランス文学史に名を残すスタール夫人(1766-1817)で、彼女の小説『デルフィーヌ』(1802)と『コリンヌ』(1807)は、フェミニズムおよびロマン主義の先駆けとして評価されてきた。一方、もう一人の女性がジャンリス夫人である。ジャンリス夫人は、後に国王となるルイ・フィリップの養育掛を務めた女性で、ルイ 15 世、ルイ 16 世の時代からフランス革命を経て、ナポレオン帝政、王政復古、さらに 7 月革命も体験した歴史の生き証人である。彼女は 84 歳で亡くなるまで執筆活動を続け、140 にものぼる著作を残した。彼女が生きた 18 世紀後半から 19 世紀にかけて、その著作は何度も再版され、英語、ドイツ語、イタリア語、トルコ語、ヘブライ語など様々な言語で翻訳されてヨーロッパ中に彼女の名が轟いていた<sup>1</sup>。当時、批評家や作家たちは彼女を避けて通ることはできず、ジャンリス夫人に対する賛否両論の意見が相次ぎ<sup>2</sup>、彼女はまさに「真の社会現象<sup>3</sup>」であった。しかし、19 世紀後半からは次第に忘れられ、今ではフランス文学史でも彼女に言及されることはほとんどない。

本稿では、スタール夫人を凌ぐほどの人気を博したジャンリス夫人がどのような女性であったのか、その生涯を追うことで明らかにしていきたい。また、彼女がどのような教育をルイ・フィリップに施したのか、そして同時代の作家たちにどのような影響を及ぼしたのかを検証していきたい。

---

\* 大阪府立大学人間社会学部人間科学科

<sup>1</sup> Marie-Emmanuelle Plagnol-Diéval が *Bibliographie des écrivains français: Madame de Genlis* (Memini, Paris-Rome, 1996)でジャンリス夫人の文献目録(再版、翻訳を含む)を掲載しているが、その数は 1000 近くのにのぼり、ジャンリス夫人と同時代の出版がその圧倒的多数を占めている。

<sup>2</sup> ジャンリス夫人に対する新聞・雑誌の批評に関しては、Marie-Emmanuelle Plagnol-Diéval, « La presse contemporaine de l'œuvre romanesque de madame de Genlis », in *Journalisme et fiction au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Peter Lang, Bern-New York-Paris, 1999 ; « Aimer ou haïr Madame de Genlis », in *Portraits de femmes*, Université de Bruxelles, Bruxelles, 2000 を参照のこと。

<sup>3</sup> Musset-Pathay, *Contes historiques*, 1826, cité par Marie-Emmanuelle Plagnol-Diéval, « Aimer ou haïr Madame de Genlis », p.97.

## 第1章 オルレアン家の養育掛

### 1. 地方貴族の娘

ジャンリス夫人は1746年1月21日、ブルゴーニュ地方オータンの近くのシャンセリで、地方貴族の父ピエール=セザール・デュ・クレストと母マリー=フランソワズ・ド・メズィエールとの間に生まれた<sup>4</sup>。父親のピエールは1751年に侯爵領サン=トーバン=シュル=ロワールを獲得し、サン=トーバン侯爵を名乗るようになる。したがって、ジャンリス夫人の娘時代の名前はカロリーヌ=ステファニー=フェリシテ・デュ・クレスト・ド・サン=トーバンであった。

フェリシテは活発で芝居好きの少女で、サン=トーバンの城でオペラ=コミックが演じられた時、キューピッドの役を演じて拍手喝采を浴びたことがあった。それから彼女は何カ月もキューピッドの舞台衣装で過ごし、聖体の祝祭日[カトリック教の行事：精霊降誕後第1主日後の木曜日]の行列に天使の衣装でつき従ったという。こうした「俗事と敬虔な儀式の混合<sup>5</sup>」を味わった経験が、後に彼女を作家への道に進ませることになる。彼女は『回想録』の中で次のように告白している。

この奇妙な教育は私の想像力と性格に信仰心と同時に空想的な性質の混合を生み出した。その痕跡が私の大多数の作品の中に過剰なほど見出せる<sup>6</sup>。

批評家のサント=ブーヴは「彼女はその時からあらゆる事柄を小説風に脚色する習慣がついてしまった<sup>7</sup>」と述べ、彼女の性質そのものが「常に仮面を被り、変装すること<sup>8</sup>」に還元されると皮肉っている。

彼女にはマルス嬢という家庭教師がついたが、マルス嬢は16歳の少女に過ぎなかった。当時の女子教育がそうであったように、フェリシテはカトリックの公教要理など初歩的な教育しか受けず、放任主義の中でスキュデリー嬢などの小説を読むことに没頭する。その他には社交界に必須の音楽やダンスを学んだだけで、綴りは

<sup>4</sup> ジャンリス夫人の生涯に関しては、主に Gabriel de Broglie, *Madame de Genlis*, Perrin, Paris, 1985 ; Alice M. Laborde, *L'Œuvre de Madame de Genlis*, Nizet, Paris, 1966 を参照した。

<sup>5</sup> *Mémoires de Madame de Genlis*, Mercure de France, Paris, 2004, p.55.

<sup>6</sup> *Ibid.*

<sup>7</sup> C.-A. Sainte-Beuve, *Causeries du lundi*, t.3, Garnier Frères, Paris, 1859, p.22. 強調は作者自身。

<sup>8</sup> *Ibid.*, p.23.

独学で覚え、書くことができるようになったのは11歳になってからであった。ただこの頃からすでに教育者としての資質を備え、近くの農民の子供たちに公教要理や音楽などを教えたと、ジャンリス夫人自らが『回想録』の中で語っている<sup>9</sup>。

父親のピエールは身分不相応の豪勢な生活を続けたため、財政困難に陥り、城の維持費にも事欠くようになる。一方、妻の方は全く意に介さず、義理の妹[夫人の母親が再婚した後にできた異父妹]シャルロットと競って華やかな生活を送った。このシャルロットが後に社交界で名を馳せるモンテッソン夫人で、社交界におけるフェリシテの指南役であり、ライヴァルともなる女性である。

1757年10月には多額の負債を負った父親は金策に失敗し、サン=トーバンの侯爵領を売却せざるを得なくなる。彼は財産を立て直すために1760年にサント・ドミンゴ島[当時フランスの植民地で、現在のハイチ共和国]に出発した。そこで財産を築いて帰国する途中、彼の船は運悪くイギリス船に拿捕され、財産はすべて没収されてしまった。その上、保釈金が払えなかったため、一時イギリスの監獄に拘留された。金策や監獄での拘留など精神的・身体的試練に押しつぶされた彼は、健康を損ない、1763年7月5日に亡くなる。

夫の死後、クレスト夫人と娘のフェリシテは女子修道院に引きこもる。当時の修道院の一部は社交場であり、クレスト夫人はそこでサロンを開き、モンテッソン夫人をはじめとする社交界の女性たちが訪れた(図版1参照)。彼女のサロンに集まってきた文学者たちは、当時カトリック批判を繰り返していたフィロゾフ(啓蒙思想家)たちに敵対する保守的な陣営であった。「自由」と「理性」を唱えるフィロゾフの思想がフランス革命を推し進める原動力になったが、フェリシテの場合、母親のサロンの常連の感化を受けて、フィロゾフへの反発がこの頃から目覚めていた。

17歳のフェリシテはハシバミ色の生き生きとした眼に明るい栗色の豊かな髪、無邪気であると同時にコケットな微笑みをたたえた優雅で魅力的な娘であった。当時の彼女はまだ高い教養の持ち主ではな



図版1 クレスト夫人の肖像

<sup>9</sup> *M moires de Madame de Genlis*, pp.51-52.

かったが、頭の回転の速さと観察力に優れていた。特に音楽の才能に秀で、クラヴサンやギター、ヴィオール、マンドリンを見事に弾きこなした。とりわけハープの名手で、サロンの寵児となった。

## 2. ジャンリス伯爵との結婚

父親のクレストがサント・ドミンゴ島に出発する時、持参したのが、ハープを演奏している娘のミニアチュールの肖像画であった。彼がイギリスのランストン監獄に拘留された時、同じく捕虜となっていたのがジャンリス伯爵(図版2参照)である。彼は当時25歳、美男で金持ちの貴族で、海軍ですでに目覚ましい功績を挙げていた。しかも、彼の叔父はルイ15世の外務大臣ピュイジュー伯爵であった。彼はクレストの持っていた肖像画の少女に一目惚れをする。叔父の力ですぐに釈放されたジャンリスは、クレスト家を度々訪れ、家族を慰めた。そこで彼は美貌のフェリシテに完全に魅了される。ジャンリス伯爵は12世紀に遡る由緒ある家柄で、地方の貧しい貴族のクレスト家とは大きな身分差があった。叔父のピュイジュー伯爵を初めとする彼の親戚は二人の結婚に猛反対するが、二人はその反対を押し切って、1763年10月30日に結婚契約を交わし、秘密裡に結婚する。大貴族の慣習に基づき、11月8日の真夜中にサン=タン Dre・デ・ザール教会で結婚式が執り行われた。



図版2 ジャンリス伯爵

この結婚は伯爵側の親戚にとって大きなスキャンダルとなり、フェリシテが上流社会に受け入れられるには数年の歳月が必要であった。ジャンリス一族でも唯一、伯爵の兄がフェリシテを自らの城に迎え入れてくれた。彼女は城の図書室で古典主義文学を読み耽り、教養を深めていった。さらに克明な日記やメモを書く習慣がこの頃からすでにあり、彼女は一生涯続けることになる。それは後に彼女の著作に役立ったばかりか、教育法として教え子に日記を書かせる(文章の誤りを添削し、道徳教育を行う)手法を編み出すきっかけとなる。

1764年には、ジャンリス夫妻はジャン=ジャック・ルソーと親しく付き合うようになる。この頃、フェリシテが気に入っていたオペラがルソーの『村の占い師』(1752)で、彼に会いたいという彼女の望みを叶えるために、夫の伯爵がルソーを自宅に招

いたのだった。ルソーは当時、音楽家として有名で、ジャンリス夫人は彼の前でハーブを演奏した。それ以来、彼は5ヶ月間ほとんど毎日、食事を取りにジャンリス宅を訪れるようになる。ルソーは自ら作曲したロマンス [ 甘美な旋律の短い声楽曲 ] 全てを楽譜付きでフェリシテに進呈している。彼女は『回想録』の中で、「彼ほど威圧することがなく、感じのいい人はこれまで会ったことがない<sup>10</sup>」と絶賛している。しかし、ルソーの過敏な感受性と自尊心のせいで、彼との交際は後に途絶えることになる<sup>11</sup>。

### 3 . パレ・ロワイヤルへの参内

1765年9月4日、ジャンリス夫人は長女カロリーヌを出産する。子供の誕生のおかげで夫の一族と和解し、彼女は宮廷に上がって、ルイ15世との謁見が可能になった。1766年春には叔母のモンテッソン夫人の庇護のもと、社交界にデビューする。当時、モンテッソン夫人はフェリシテより8歳年上の28歳で、金髪碧眼の優雅な美女であった。彼女は裕福なモンテッソン侯爵と結婚していたが、夫は80歳の高齢で病弱であったため、束縛を受けることなく自由な生活を満喫し、社交界の女王として君臨していた。フェリシテはモンテッソン夫人からオルレアン公<sup>12</sup>にも紹介されている。この頃からオルレアン公はモンテッソン夫人に好意を抱いていたとされ、モンテッソン夫人は夫の死後、1773年7月にオルレアン公と貴賤相婚 [ 王族と身分

<sup>10</sup> *Mémoires de Madame de Genlis*, p.155.

<sup>11</sup> ルソーがジャンリスの領地シルリで取れたワインを気に入り、2本送ってくれと頼んだところ、ジャンリス伯爵はワインを25本、籠に詰めて送った。それがルソーの自尊心を傷つけ、彼は激怒してワインを送り返した。彼は伯爵の行為を貴族の「傲慢さ」(*Ibid.*, p.157)の現れとみなしたのだ。さらにルソーの芝居がコメディ・フランセーズで上演された時、ルソーに同行したジャンリス夫人がルソーを「縁日の野蛮な獣」(*Ibid.*, p.160)のように観客の前で晒し者にしたと彼が疑った。それ以来、彼との交際が途絶えたとは彼女は『回想録』の中で語っている。

<sup>12</sup> 1328年からフランスを支配していたヴァロワ家に代わってブルボン家アンリ4世が1589年に王位を継承し、それ以降ブルボン朝時代となる。アンリ4世の後、ルイ13世に引き継がれ、さらに太陽王ルイ14世が絶対王政を確立した後、ルイ15世、ルイ16世と続き、ルイ16世がフランス革命で処刑されるまでブルボン家の子孫が王位継承者となった。フランス革命後、ナポレオンの帝政時代を経て王政復古になると、ルイ16世の弟プロヴァンス伯がルイ18世として国王になり、彼の死後はその弟がシャルル10世となって王位を引き継いだ。それに対し、ブルボン・オルレアン家はルイ13世の次男フィリップ1世がオルレアン公爵を名乗り、その子孫が代々その名を受け継いだ。オルレアン家は国王に嫡子がいない場合は王位を継ぐことができた。したがって、オルレアン家はブルボン王家と密接な関わりを持ちながら、王位継承を争う半ば敵対関係にもあった。とりわけ7月革命後、オルレアン公ルイ・フィリップが王位に就いてから、ブルボン家を支持する正統王朝派とオルレアン派の対立は激しくなる。

の低い女性との結婚。妻およびその子どもには相続権などはない] をすることになる。

1767年1月、夫の一族との和解によって、ジャンリス夫婦はパリに居を定めることができるようになった。フェリシテはピュイジュー伯爵夫妻にも気に入られ、終生親しく付き合うようになる。この年に次女ピュルケリが誕生し、翌年には長男カジミルも生まれている（カジミルは数年後に死亡）。

ちょうどこの頃、「社交界劇場 (théâtre de société)」「[ 大衆向けの劇場ではなく、社交界のサロンなどで貴族階級が親しい友人を前にして芝居を演じること ]」が大流行し、上流階級では自らの屋敷に劇場を組み立て、そこで名門貴族の女性たちが女優となって芝居を演じた（図版3参照）。詩人のシャンフォールが社交界劇場での4大女優の中に、モンテッソン夫人とジャンリス夫人の名を挙げているように<sup>13</sup>、二人は本職の女優はだしの演技を見せ、注目を浴びた。ジャンリス夫人の場合、シナリオも自らが考え、女優として芝居を演じるだけでなく演出も行った。

この頃のジャンリス夫人について、ダブランテス公爵夫人は次のように書いている（図版4



図版3 マリー・アントワネットの劇場

1780年にマリー・アントワネットがヴェルサイユ宮殿敷地内のプチ・トリアノンに建てさせた劇場。彼女はそこで、ルソーのオペラ『村の占い師』や芝居を演じた。

参照)。



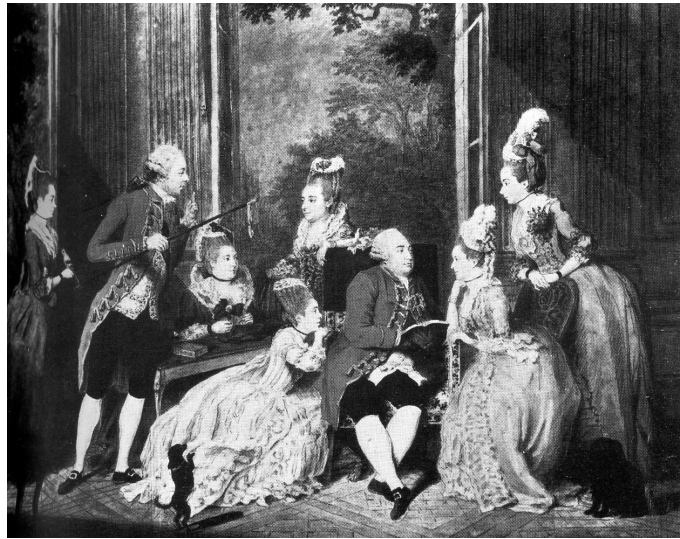
図版4 ジャンリス夫人（22歳頃）

ジャンリス夫人はこの頃、とてもきれいで澁刺としていて、とても優雅で、はっきり言うと、とても挑発的な女性であった。彼女の非常に優れた精神はすでに将来の姿を予告していた。彼女はうっとりするような視線と非常に美しい眼を持っていた。鼻はやや大きい鼻先が軽く反って、顔つきに刺激的な表情を与えていた。その表情はこのきれいな顔全体を支配する鋭い観察力と結びつき、真の魅力を作り出していた。彼女の背丈は高すぎもせず、ちょうどいいプロポーションであった<sup>14</sup>。

<sup>13</sup> Cf. Gabriel de Broglie, *op.cit.*, p.49.

<sup>14</sup> Duchesse d'Abrantès, *Histoire des Salons de Paris*, 1837, cité par Gabriel de Broglie, *op.cit.*, p.476.

1772 年、フェリシテはシャルトル公爵夫人 [シャルトル公爵はオルレアン公爵の長男の称号] の女官としてパレ・ロワイヤル<sup>15</sup>に上がる。その美貌にさっそく眼をつけたのがシャルトル公爵で、彼女は彼の愛人となる。それ以降 15 年にわたって、ジャンリス夫人はシャルトル公に絶大な力を及ぼすことになる(図版 5 参照)。7 月にシャルトル公爵夫人が女官を伴ってフォルジュの湯治場に滞在した時には、後から追いかけてきたシャルトル公とジャンリス夫人の熱い逢瀬が繰り返され、二人の交わした情



図版 5 オルレアン一家

左から：ポリニャック夫人、シャルトル公爵、モンテッソン夫人  
右から：ジャンリス夫人、シャルトル公爵夫人、オルレアン公爵

熱的な手紙が残されている。一方、シャルトル公爵夫人の方は 19 歳のおとなしい従順な女性で、むしろジャンリス夫人を頼りにしていた。

1773 年 10 月 5 日、シャルトル公爵の長男、ヴァロワ公爵ルイ・フィリップが誕生する。翌年 5 月 9 日にはルイ 15 世が逝去し、ルイ 16 世が即位する。

#### 4. ヴォルテールとの出会い

1775 年 8 月初めにジャンリス夫人はスイス旅行を企て、ローザンヌとジュネーヴに立ち寄っている。好奇心旺盛な彼女は、ジュネーヴ近郊のフェルネーに居を構えていたヴォルテールを訪ねている。彼女は、その時の様子を『回想録』の中で次のように描いている。

夕食の後、ヴォルテール氏は私が音楽家であることを知っていて、ドゥニ夫人にクラヴサンを演奏させた。[...] 彼女がラモアの曲を弾き終わろうとした時、7, 8 歳の可愛らしい女の子が部屋に入ってきて、ヴォルテール氏の首に飛びついて「パパ」

<sup>15</sup> パレ・ロワイヤルは、もともとはルイ 13 世の宰相リシュリュー卿が 1629 年に建てた私邸で、リシュリューの死後王家に移譲され、それ以降「パレ・ロワイヤル(王宮)」と称されるようになった。ルイ 14 世がヴェルサイユに宮殿を移した折にパレ・ロワイヤルは弟のオルレアン公に譲られ、代々オルレアン家が受け継いだ。



と呼んだ。彼は少女の愛撫を優雅に受けた。私がこの優しい光景をうっとり眺めているのを見た彼は、この子は彼が嫁がせた、あの偉大なコルネイユの孫の子どもだと説明した。もし私が彼の注釈 [『コルネイユに関する注釈』] を思い出さなかったならば、そこでは不公平さと羨望があまりに不器用な形で表れていたことか！、この瞬間、どんなに感動したことだろう。[...]

ヴォルテール氏はジュネーヴからの訪問客の何人かと会った後、馬車での散歩を私に提案した。[...]彼は私たちを村まで案内し、彼が建てた家々や彼が設立した有益な施設を見せてくれた。その姿は本における彼よりもずっと偉大であった。というのも、村では至る所にきめ細かな善意が見出せ、あれほど不信心で偽りや悪意に満ちたものを書いた同じ手がこれほど気高く、これほど思慮深く有益なことを成し遂げたとは信じられなかったからだ<sup>16</sup>。

ヴォルテールは、懐疑主義者として教会の伝統的な権威を批判したため、宗教を社会の基盤と考えるジャンリス夫人の眼には悪徳の象徴として映っていた。それだけに実際の人物と書物から得たヴォルテール像との乖離は大きく、彼女は驚きの念を抱いている。

9月5日、ジャンリス夫人はパレ・ロワイヤルに帰還する。この頃、パレ・ロワイヤルの実権は彼女が一手に握り、女官の任命など彼女が采配を振るようになる。

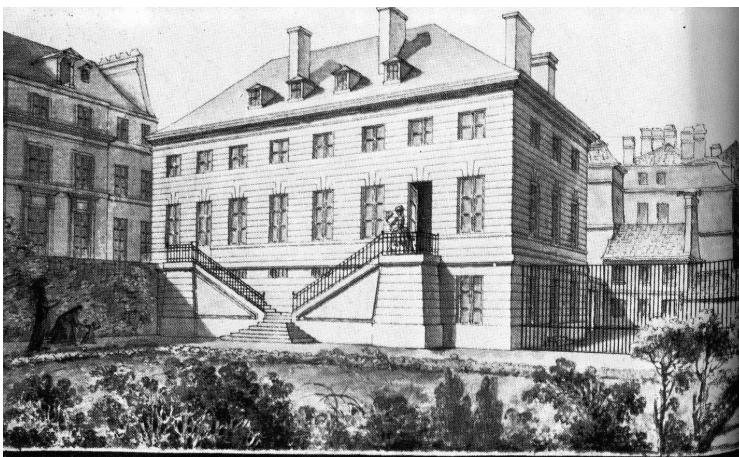
1776年1月21日、ジャンリス夫人は30歳を迎える。彼女は実年齢より若く見え、すらりとした体つきでまだ魅力的であったが [彼女に言い寄る男性も少なからずいた] 誕生日を機に頬紅を塗るのをやめた [18世紀当時、つけぼくると頬紅は貴族の女性に欠かせない化粧であった]、それはコケットリーとの決別を意味し、それ以来、彼女は知的活動に邁進するようになる。シャルトル公爵夫人に仕えるかたわら、イタリア語、英語を学び、物理や化学の講義を受け、様々な知識を深めていった。さらに週に2日、サロンを開いて詩人のラ・アルプやマルモンテルなど著名な文学者や知識人、音楽家を集め、博物学者ビュフォンや作曲家グリユックとも親しい間柄であった。

当時、旅行熱がパレ・ロワイヤルに席卷し、シャルトル公爵夫妻はジャンリス夫人など女官を伴って1776年4月8日からイタリアに旅立つ。パリからボルドー、モンペリエ、エクス、マルセイユ、ニースを経由して一行はジェノヴァ、ヴェニス、ローマを訪れる。この旅でジャンリス夫人は各地の王侯貴族と交流し、シャルトル公爵夫人ともそれまで以上に親しみを増していく。

<sup>16</sup> *Mémoires de Madame de Genlis*, p.223.

## 5. ベルシャスへの移住

1777年8月25日、シャルトル公爵夫人に双子の女の子が生まれる。かねてから公爵夫人との申し合わせにより、ジャンリス夫人が二人の養育掛（gouvernante）になる。彼女はしきたりに反して、パレ・ロワイヤルではなく、修道院に引きこもって子どもたちを育てることを主張した。その主張は聞き入れられ、シャルトル公がベルシャスのサン=シュルピス修道院の敷地内に、ジャンリス夫人が作成した見取り図に基づいて別棟を建て、彼女はそこに子供たちと一緒に住むことになった（図版6参照）。建物ができるまでの2年間、1777年から78年にかけて、彼女は娘たち



図版6 ベルシャスの建物

ほとんど正方形の建物で、2階正面には7つの窓と入口がある。2階にジャンリス夫人と生徒たちの部屋がある。1階は台所と女中部屋など。寝室や食堂の壁面、階段にはローマ史や神話を描いた絵画や世界地図が一面に飾られ、子どもたちの教育の一環をなしていた。

のためにお芝居のシナリオを書き、パレ・ロワイヤルで上演してその豊かな才能が上流階級で知れ渡りようになる。

このように、ジャンリス夫人はパレ・ロワイヤルにおいて権力の絶頂にあったが、一方で宮廷人の羨望や誹謗中傷の的となった。さらにヴェル

サイユ宮廷と対立するパレ・ロワイヤル側に立ったため、マリー・アントワネットや彼女の取り巻きの一人であった叔母のモンテッソン夫人とも敵対するようになる。

ジャンリス夫人は後にこの頃の生活を

振り返って、「私がパレ・ロワイヤルで過ごした時期は、私の人生で最も輝かしい時期であると同時に、最も不幸な時期でもあった<sup>17</sup>」と述べている。子供たちの養育のためにパレ・ロワイヤルを去って、ベルシャスに引きこもることは、彼女にとって、宮廷の煩わしさから逃れて自由な生活を享受することでもあった。

1779年4月にジャンリス夫人はパレ・ロワイヤルを去り、彼女の母親と娘たち、そしてオルレアン家の双子の女の子（一人は幼くして亡くなり、アデライド一人になる）と共にベルシャスに移る。そこでは每晚8時に、シャルトル公爵夫妻や夫の

<sup>17</sup> Ibid., p.225.

ジャンリス伯爵が集まり、土曜日には以前と変わらず、文学者や芸術家が集うサロンが開かれた。

ルソーの友人でもあり、彼の『エミール』(1762)に影響を受けたジャンリス夫人は、新しい教育法を実践しようとして以前から考えていた。ルソーはこの著作の中でエミールという架空の生徒を想定し、彼の教育に従事する理想の家庭教師として、どのような教育を行うべきかを論じている。彼はあくまでも理論を述べるだけで、実行には移さなかったが、ジャンリス夫人はそれを実地に応用しようとした。ルソーが想定する生徒「エミール」の必須条件は、健康な肉体を持った「孤児」であること、またはたとえ両親がいても、教育については家庭教師に全権委任されていること、であった。さらに長期間継続して一人の家庭教師が子どもの教育に携わる一貫教育をルソーは主張していた。

ジャンリス夫人はルソーの教えに倣い、1780年に6歳のイギリス人の女の子(本名：ナンシー・シムズ)を引き取り、「パメラ」という名で呼び、理想の教育をすべくシャルトル公の娘アデライドや彼

女の娘たちと一緒に育てた。パメラは金髪の可愛い少女で(図版7参照)、後に美しく成長した彼女(図版8参照)は、アイルランド貴族エドワード・フィッツ＝ジェラルド卿に見初められ、結婚することになる<sup>18</sup>。2年後にはさらにもう一人イギリス人の女の子を引き取り、エルミーヌと名付けて育てた。ジャンリス夫人は生涯にわたり、男女の複数の子どもを養子にしてその教育に打ち込み、教



図版7 ハープの練習

左から：ジャンリス夫人、アデライド・ドルレアン  
パメラ



図版8 美しく成長したパメラ

<sup>18</sup> ジャンリス夫人に敵対する陣営は、パメラをジャンリス夫人とシャルトル公との隠し子だとみなして非難したが、プログリなど多くの研究者はそれを否定している。

育が彼女の天職であった。

1779年には7つの戯曲を収めた『少女のための戯曲』を初出版し、80年までに全部で4巻本の戯曲を発表した。それを読んだグリム[ドイツの作家で啓蒙思想家。オルレアン公の朗読係を務めた]は、「とても自然で巧みな芝居」だと評価し、子どもに相応しい「主題の無垢性」を絶賛している<sup>19</sup>。というのも、彼女は男役抜きで、恋愛の要素が入らない新しいジャンルの教育劇を創作したからだ。戯曲の目的は子供たちを楽しませるだけでなく、「役に立つ道德原理を例証し、公の場での立ち居振る舞い、微笑みや話し方を少女たちに教える<sup>20</sup>」ことにあった。したがって、全ての芝居は道徳的な教訓で終わっている。この戯曲集は非常に評判が良く、ジャンリス夫人は人々の期待に応えて、さらに大人向けの『社交界劇場』(1781)を出版するほどであった。

## 6. オルレアン家の養育掛に就任

絶対王政下では、王族の男子教育は王位継承と結びつき、政治的・社会的にも重要課題であった。伝統的に、王族の男子は生まれるとまず、女の養育掛(gouvernante)に預けられる。Gouvernanteは名誉上の肩書だけで、配下の女性たちが最初の教育を行い、基本的には幼い親王のお世話係に過ぎない。8歳になると礼儀作法や典礼に長けた男の養育掛(Gouverneur)に取って代わられる。この養育掛(日本の皇室で言えば、一部、侍従長の職務に重なる)は輝かしい功績を挙げた退役軍人または宮廷の高官から選出される。養育掛が若い親王の生活すべてを監督し、僧侶または文学者の中から1人ないし数人の家庭教師(précepteur)を選び、教育を施すことになる。

シャルトル公の長男、ルイ・フィリップのgouvernanteはロシャンボー夫人であった。ルイ・フィリップには王位継承の望みは薄かったが、オルレアン家の長男として貴族の称号や莫大な財産を相続することになっていた。それゆえ、教育の要となるGouverneurは慣習に従えば、パレ・ロワイヤルの高官から選ばれるはずであった。ベルナール・ド・ボナールがジャンリス夫人の推薦で1778年からルイ・フィリップとその弟の養育掛補佐となり、本来は彼が養育掛に昇格するはずであった。しかし、ボナールは教育法を巡ってジャンリス夫人と対立し、彼以外の人物を探す必要があった。

<sup>19</sup> Grimm, *Correspondance*, Garnier, Paris, 1880, vol.VII, cité par Alice M. Laborde, *op.cit.*, p.29.

<sup>20</sup> Gabriel de Broglie, *op.cit.*, p.95.

ジャンリス夫人は『回想録』の中で、養育掛の任命に関してシャルトル公と交わした会話の一部始終を再現している<sup>21</sup>。その場面で彼女は、シャルトル公に候補者の名を次々に挙げていくが、全て拒否される。最後に彼女が「それでは私では！」と言うと、「悪くないね」とシャルトル公が真面目に答えた。冗談を言ったに過ぎないと弁解する彼女に対して、彼は「例外的で栄えある出来事の可能性を視野に入れている」と述べ、「さあこれで決まった、あなたが彼らの養育掛になるのだ」と語ったという。

1782年1月6日、ジャンリス夫人はオルレアン家の養育掛として公式に任命される。この知らせはパリ中に広がり、大きなセンセーションを引き起こした。これまで男性が占有してきたポストにジャンリス夫人が任命されたことへの宮廷人の嫉妬や反感は大きく、彼女への誹謗中傷が繰り広げられた。とりわけ、シャルトル公の愛人の立場を利用したという非難が彼女に集中した。例えば、グリムは「私は学校では monsieur (旦那) / 閨房では madame (奥様)<sup>22</sup>」という詩句を発表して、彼女を揶揄した。しかし、本人は意に介することもなく、オルレアン家の教育を統括する養育掛として、4人の子ども(長男ヴァロワ公爵、次男モンパンシエ公爵、三男ボージョレ伯爵と長女アデライド・ドルレアン)の教育を一手に引き受けることになる。

王族の教育を女性が行うことが異例であっただけではなく、彼女が養育掛と家庭教師をほぼ兼ね備えたことも異例であった。伝統的には養育掛は倫理・道徳教育など子どもの精神面を導き、家庭教師は知識を授けるという役割分担があった。知識教育と精神教育の分断を批判したのがルソーで、彼は幼い子どもに精神教育を伴わないで、単に知識のみを詰め込むことの弊害を訴えた。ジャンリス夫人はこの点でもルソーの教えを守ったことになる。3人の男の子はパレ・ロワイヤルからベルシヤスに毎日通い、そこで妹のアデライドやジャンリス夫人の娘たちと一緒に学んだ。男女別々の教育が伝統であったのに反し、男女一緒に教育を施したことにも彼女の独自性と近代性が見出せる。

ジャンリス夫人は自らの職務に誇りを持ち、gouvernanteではなく gouverneur とい

<sup>21</sup> *Mémoires de Madame de Genlis*, pp.260-261. 引用文の強調は作者自身。

<sup>22</sup> Grimm, *Correspondance littéraire*, cité par Nicole Pellegrin, « Une pratique féminine de l'histoire : quelques remarques sur le cas de M<sup>me</sup> de Genlis », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*, Publications des Universités de Rouen et du Havre, Rouen, 2008, p.242.

う男性形の名称を使うことに固執した。さらに同じ年に『アデルとテオドール、または教育に関する書簡』を3巻本で出版したばかりか、その補遺として『女性による男子教育、とりわけ王族の子弟の教育に関する試論』を出版し、自らの教育を正当化している。そこには女性としての強い自負と教育者としての絶対的な自信が見出せる。とりわけ、小説として出版された『アデルとテオドール』は、作者が就任したばかりの養育掛であっただけに話題を呼び、ベストセラーになる。しかも、当時の人々からはモデル小説[モデルとなっている実在の人物などをつかむ鍵となる言葉がそれとなく呈示されている小説]とみなされ、モデルとされたモンテッソン夫人など周囲の人々を苛立たせた<sup>23</sup>。それも読者の関心を一層掻き立てる要因となった。『アデルとテオドール』はたちまち英語、スペイン語、ドイツ語に翻訳され、ジャンリス夫人の名はヨーロッパ中に広がった<sup>24</sup>。

彼女はこの著作でアカデミー・フランセーズが主宰する第一回目のモンティヨン賞[道徳的で有益な作品に与えられる賞]の受賞を目指し、デピネ夫人の『エミリーとの会話』(1781)と賞を争った。デピネ夫人はルソーの庇護者であり、ヴォルテールやディドロなどと親しく、彼女のサロンはフィロゾフ派として有名であった。アカデミー・フランセーズ会員のほとんどがダランベールなどフィロゾフ派であったため、結局、デピネ夫人が圧倒的な得票数でモンティヨン賞を獲得する。

ジャンリス夫人は同年に『城の夜のつどい』[夜寝る前に3人の子どもたちに母親が語るお伽話集]を出版し、大成功を収める。彼女はお伽話の多くが恋愛を主題とし、その魅惑的な世界が子どもたちの想像力を過度に掻き立てるので、子どもに読ませるには危険だと考えていた。それゆえ、道徳的教訓を盛り込んだ独自のお伽話を創作した。モンティヨン賞を受賞できずに悔しい思いをした彼女は、フィロゾフたちへの復讐として、この物語集の中でヴォルテール、フォントネル、マルモンテルを「偽哲学者」と非難し、彼らへの敵意を露わにした。

1787年、ルイ・フィリップの初聖体の折に、教え子に与える教理問答書として『幸

<sup>23</sup> 『アデルとテオドール』に登場するダルマヌ男爵夫人(二人の子どもに理想的な教育を施す母親)は作者の分身であり、シュルヴィル夫人はモンテッソン夫人がモデルとされている。モンテッソン夫人は、シュルヴィル夫人の性格描写(学識を銜った女性として否定的に描かれている)は彼女を侮辱したものと怒りを露わにした(Cf. Isabelle Brouard-Arends, Note 66 d'*Adèle et Théodore, ou Lettres sur l'éducation*, Presses Universitaires de Rennes, Rennes, 2006, pp.645-646)。

<sup>24</sup> 『アデルとテオドール』に関しては、拙論「国王ルイ・フィリップの養育掛ジャンリス夫人の女子教育論『アデルとテオドール』 - 」、『女性学研究』(大阪府立大学女性学研究センター)17号、2010年を参照のこと。

福と真の哲学の唯一の基盤とみなされる宗教 オルレアン公爵閣下のお子さまたちの教育に役立てるために作成された書物。現代の哲学者と称する者たちの主義に反駁する』を出版する。彼女はそこでも再び、フォントネル、モンテスキュー、ヴォルテール、ダランベール、ディドロ、さらには和らげた口調ではあるが、ルソーでさえも非難した。彼女によれば、彼らの著作は若者の想像力に火をつけ惑わせる不道德なものであった<sup>25</sup>。一方、フィロゾフたちもジャンリス夫人に激しく反論し、グリムは皮肉な口調で彼女を「教会の母」と揶揄した。それ以降、半世紀にわたってフィロゾフ派と激烈な論争を繰り広げることになる。

## 7. ルイ・フィリップの教育

ルイ・フィリップにジャンリス夫人が施した教育に関して言えば、それまで贅沢な生活に慣れ、甘やかされて育った彼にとって、彼女が課す規律は過酷なものであった。ルイ・フィリップ自身が当時の生活について、後にヴィクトル・ユゴーに次のように語っている。

彼女は妹と私を容赦なく育てました。私たちは夏も冬も朝 6 時に起き、食事は牛乳と冷肉、パンで、おいしい食べ物も砂糖菓子も何もありませんでした。たっぷりの勉強に娯楽はほとんどなし。私に板の上で寝るのに慣れさせたのも彼女です。山ほどの手仕事を学ばされました。彼女のおかげで、見習理髪師の仕事も含めて、全ての仕事を少々実践できます。私はフィガロ[ボーマルシェの『セヴィリアの理髪師』『フィガロの結婚』に登場する従僕]のように瀉血できます。指物師、馬丁、石工、鍛冶師でもあります。彼女は融通がきかず厳格でした。幼い頃は彼女を恐れていました。当時、私は弱々しく怠け者で臆病な少年でした。ネズミにも怯えていたのです。彼女は私をかなり大胆で勇気のある男にしてくれました<sup>26</sup>。

ジャンリス夫人は補佐役として数学、物理学、化学、デッサンの教師を雇い、子どもたちに伝統的な教科(文学、歴史、神話学)の他にも博物学、地理学、物理学、解剖学など新しい学問を学ばせた。とりわけ、ラテン語やギリシア語よりも生きた外国語を学ばせることに力を入れた。ルソーは『エミール』の中で、「12 歳ないし 15 歳までは、どんな子どもでも、神童は別だが、真に二ヶ国語を習得できると思

<sup>25</sup> ジャンリス夫人のフィロゾフへの批判に関しては、François Bessire, « M<sup>me</sup> de Genlis ou l'« ennemie de la philosophie moderne » », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation* を参照のこと。

<sup>26</sup> Victor Hugo, *Choses vues*, dans *Histoire, Œuvres complètes*, Bouquins (Robert Laffont), Paris, 1987, p.669.

えない<sup>27</sup>」と述べ、複数の言語を幼い時から学ばせることには否定的であった。ジャンリス夫人はこの点ではルソーと意見を異にしていた。彼女はドイツ人の庭師やイギリス人の召使を雇い、それぞれの言語で子どもたちと会話をさせた。さらに夕食の席では英語、夜食ではイタリア語での会話を課した。したがって、ルイ・フィリップは11歳で4ヶ国語を流暢に話すことができたという。こうした言語の習得や、様々な手仕事を王族教育のプログラムに導入したのも、彼女が初めてであった。

さらに、当時としては革新的であったが、衛生状態や食べ物、服装にまで気を配った。体を鍛えるために乗馬や水泳、フェンシングを習わせるなど、彼女はフィジカルな面での教育も怠らなかった。音楽は彼女自らが教え、絵に関しては画家のカルモンテル、ミリス、そして後にナポレオンの首席画家となるダヴィッドを雇い、デッサンを学ばせた。ジャンリス夫人は子どもたちの教育プログラムや一日の時間割を綿密に立て<sup>28</sup>、それに従って9年間一貫した教育を行った。

彼女の厳格な教育法に教師たちの方が耐えられず、次々にやめていったが、子どもたちはむしろ彼女への愛着を深めていった。実際、ルイ・フィリップはユゴーに、人生で唯一の恋をした相手はジャンリス夫人であったと告白している<sup>29</sup>。フランス革命の嵐の中で夫人との関係は一時疎遠になるが、ルイ・フィリップは最後まで彼

<sup>27</sup> Jean-Jacques Rousseau, *Émile, Œuvre complètes*, Pléiade (Gallimard), t. IV, Paris, 1969, p.346.

<sup>28</sup> ルイ・フィリップの日課は次のようなものであった(Cf. Alice M. Laborde, *op.cit.*, pp.68-82)。朝7時起床(ルイ・フィリップによれば6時)、ギユイヨ神父の指導のもと、1時間ラテン語、1時間公教要理の勉強をし、家庭教師のルブランのもとで計算の勉強を1時間した後、11時に弟たちと一緒にパレ・ロワイヤルからベルシャスにルブランに付き添われて向かう。ルブランは毎日3人の男の子の学習記録をジャンリス夫人に報告し、ジャンリス夫人はそれに基づいて生徒たちを褒めたり叱ったりする。2時に食事。食事の後、9時の夜食の時間までジャンリス夫人が子どもたち(ベルシャスに住むアデライドやカロリーヌ、ピュルケリ、パメラ、エルミーヌ、ジャンリス夫人の甥と姪も含む)の教育に携わる。彼女はまず、子どもたちに順番に15分ずつ本(主に歴史物語)を音読させ、発音の矯正やテキストの内容に関する質問をした後、夫人自身が音読をする。この読書に少なくとも2時間はかける。読書の後、読んだ本のレジュメと、様々な道徳的問題(「友人に対してどのような義務を負っているか」など)への答えを書かせ、ジャンリス夫人がその添削をする。次に地理の勉強をした後、ドイツ人の先生のもとでピアノの練習。夜、デッサンの勉強。9時に男の子たちはルブランに連れられてパレ・ロワイヤルに戻る。こうした時間割が8歳の時から9年間、ルイ・フィリップに課せられた。また、数学は週に3回学ばせ、6年間で数学から幾何学、力学まで段階を追って進ませた。礼儀作法を学ばせるためには、土曜日をレセプション日と定め、選ばれた観客の前で子どもたちに音楽を奏でたり芝居を演じさせたりした。夏と冬はラ・モット城とサン＝ルーの屋敷で過ごし、地理、気候、社会学の実地勉強をさせた。ドイツ人の庭師の指導のもと、土地を耕したり、重量挙げの練習をするなど、体を鍛える訓練も怠らなかった。

<sup>29</sup> Victor Hugo, *op.cit.*, p.669.



女への愛情と敬意を失うことはなかった。ジャンリス夫人は子どもたちを厳しく躾けたが、細心の注意と愛情を持って接し、華やかな宮廷生活を断念して彼らの教育に献身的に打ち込んだため、彼らの愛情を勝ち取ることができた。

## 第2章 フランス革命から7月王政まで

### 職業作家の誕生

#### 1. フランス革命の勃発

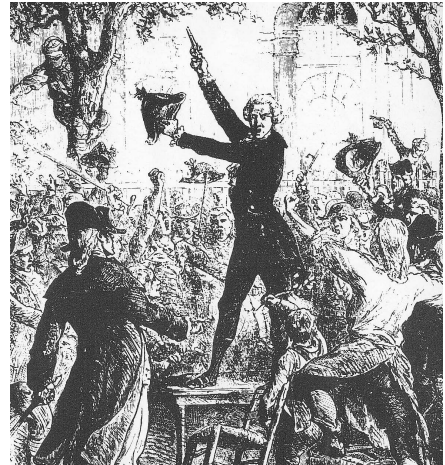
1785年11月18日、オルレアン公が死去し、息子のシャルトル公が父親の後を継いでオルレアン公となる。当時、フランス政府は相次ぐ対外戦争に派兵し、莫大な金を費やしたため国庫はほぼ破綻状態にあった。しかも疫病や飢饉で民衆は危機的状況に陥っていた。ルイ16世の歴代の財務総監（チュルゴー、ネッケルなど）は財政の根本的改革の必要を認識し、その解決策として特権階級である僧侶階級と貴族階級に、これまで免除していた税金を課すことを検討し始めた。それに反対したのが貴族たちで、1787年7月に高等法院は新課税を審議するために三部会を招集することを要求する。1788年8月、全国三部会を召集することが布告され、選挙を経て1789年5月5日にヴェルサイユで三部会が開催される。しかし、そこで特権階級と第三身分が鋭く対立し、国王は議場を閉鎖してしまう。そのため、6月20日に第三身分の代表者たちはジュ・ド・ポーム（屋内球戯場）に移り、新しい憲法を制定するまで国民議会を解散しないことを誓う。それがダヴィッドの絵で有名な「ジュ・ド・ポームの誓い」である。

第三身分のこうした動きに一部の進歩的貴族や僧侶が合流するようになる。オルレアン公もその一人で、革命前からすでに、パレ・ロワイヤルは宮廷と敵対するグループの集合場所となっていた。ミラボー、シエイエス、バルナーヴなど革命の立役者たちがそこに集まり、ジャンリス伯爵もその一人であった。したがって、財務総監ネッケルが罷免された翌日の7月12日、弁護士のカミーユ・デムーランが民衆に向かって「武器を取れ！」とアジ演説をしたのが、パレ・ロワイヤルのカフェ・ド・フォワの前であったのも不思議ではない（図版9参照）。

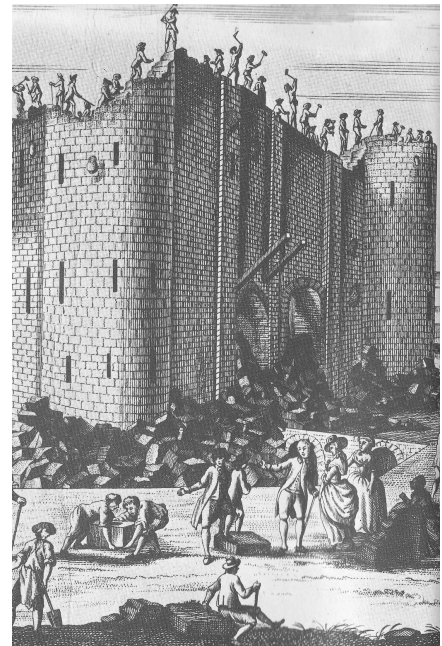
7月14日、熱狂した群衆が武器を求めて向かったのが、アンヴァリッドとバスチーユ監獄であった。バスチーユは国王の封印状によって、裁判なしに政治犯を無期限に収容してきた監獄で、言わば、絶対王政の弾圧の象徴であった。民衆はバスチーユを襲撃したばかりか、その壁を取り壊し始めた。それはちょうど、1989年のベルリンの壁の崩壊と同じ状況であった。

フランス革命が勃発した時、ジャンリス夫人はパリ郊外のサン＝ルーの屋敷に子どもたちと一緒にいた。彼女はバスチーユ崩壊の知らせを聞くと、8月13日にバスチーユまで子どもたちを連れて見学に行っている(図版10参照)。彼女は『回想録』の中で、その時の心境を次のように描いている。

生徒たちに全てを見せようという欲望 [...] が私を捉え、サン＝ルーからパリに数時間戻り、 [...] パリ中の民衆が交替でバスチーユを打ち倒し、解体している様子を見に行った。この光景を思い浮かべることが不可能であろう。その時どのような状態であったかを想像するには、自分の眼で見る必要がある。この恐るべき監獄は、途方もない情熱で働く男や女、子どもたちで覆い尽くされ、建物や塔の最も高い部分まで人で一杯だった。この驚くべき数の自発的な労働者、彼らの熱狂ぶり、独裁の象徴であるこの恐ろしい建物が崩れ落ちるのを見る喜び、 [...] これらすべての光景が想像力と心に等しく語りかけてきた。バスチーユ襲撃で犯された残虐行為に私ほど恐怖に駆られた者は誰もいない。しかし、20年以上にわたる横暴な監禁を目の当たりにしてきたので、[...] 白状するが、その解体は私に感動ときわめて激しい喜びをもたらした<sup>30</sup>。



図版9 パレ・ロワイヤルでアジ演説をするカミーユ・デムーラン



図版10 バスチーユ解体の見学

この文章からも明らかなように、彼女はあらゆる機会を逃さず、子どもたちに直接、自分の眼で観察させ、経験させるという実地教育を何よりも優先した。それと

<sup>30</sup> *Mémoires de Madame de Genlis*, pp.269-270. 下線引用者。

同時に、バスチーユ崩壊の光景を自由の証として好意的に捉えていた。

10月5日、パンを要求する庶民の女性たちがヴェルサイユに向けて行進し、彼女たちの要求に屈した国王一家がパリまで連れ戻される事件が起こる。この混乱に乗じ、当時、オルレアン公の秘書であったコルデロス・ド・ラクロ〔元軍人で『危険な関係』の作者として有名〕がルイ16世に代わってオルレアン公を摂政にしようと陰謀を巡らす。しかしそれが露見すると、オルレアン公はラクロなど側近と共に10月14日にイギリスに亡命する。彼は、子どもたちの養育をジャンリス夫人に全権委任してフランスを発っていった。

## 2. ジャコバン教育

ジャンリス夫人は以前からマリー・アントワネットや取り巻きのポリニャック夫人に嫌悪感を抱き、むしろ立憲君主制を望んでいた。そのため、当時16歳のルイ・フィリップを連れて国民議会に足繁く通い、彼に革命熱を吹き込んだ。彼女の「ジャコバン教育<sup>31</sup>」によって、ルイ・フィリップは「民主主義的なプリンス<sup>32</sup>」となる。一方、彼の実の母親、オルレアン公爵夫人はジャンリス夫人にそれまで全幅の信頼を寄せ、10年近く子どもたち4人の教育を彼女に任せっきりであった。しかしこの頃、ジャンリス夫人と夫の公爵との愛人関係を知り、彼女への不信感を募らせていく。とりわけ、息子たちが革命家になることを恐れた公爵夫人は彼らを取り戻そうとするが、すでに手遅れであった。子どもたちのジャンリス夫人への愛情は母親以上に深く、とりわけルイ・フィリップは母親よりもジャンリス夫人を選んだ<sup>33</sup>。

1790年1月9日、ルイ・フィリップは貴族の称号を捨てて市民の誓いを立て、「市民シャルル(citoyen Charles)」という署名をする。彼の激しい革命熱に恐れをなしたジャンリス夫人は、行き過ぎないようにたしなめるが、17歳になって彼女の手から離れたルイ・フィリップは、ジャコバンクラブに入会する。ジャコバンクラブはこの当時はまだ、進歩的な代議士や弁護士から成る穏健派のグループであった〔ルイ・

<sup>31</sup> Gabriel de Broglie, *op.cit.*, p.189.

<sup>32</sup> *Ibid.*, p.190.

<sup>33</sup> ルイ・フィリップはジャンリス夫人に宛てた手紙の中で次のように書いている。「私たちが二人だけの時、あなたをお母さん(Maman)と呼ぶ許しを頂くためにこの手紙を書いています。あなたがこの恩恵を拒否されないことを願っています。というのも私があなたを最も優しい息子が母親を愛しているのと同じくらい愛していることを知っているはずです」(Lettre inédite de Louis-Philippe à Madame de Genlis, 28 octobre 1789, cité par Gabriel de Broglie, *op.cit.*, p.191)

フィリップは後に、ジャコバンクラブの一員であったことを後悔している。7月10日、オルレアン公はイギリスからパリに戻り、シャン・ド・マルスで行われた革命一周年を祝う連盟祭にも参加している。

1791年6月21日、国王一家はフランスを脱出して、マリー=アントワネットの兄のオーストリア皇帝のもとに逃亡を図るが、ヴァレンヌで正体が発覚してパリに連れ戻される。この時、ラクロがルイ16世を廃位させ、オルレアン公を摂政として擁立するよう再び画策する。しかし、オルレアン公はジャンリス夫人の忠告もあって摂政の地位を辞退する<sup>34</sup>。

同年10月11日、ジャンリス夫人は体調を崩したアデライドの温泉治療という名目で、アデライド、パメラ、姪のアンリエットなど子どもたちを連れてフランスを発ち、イギリスのバースに向かう〔彼女の娘のカロリーヌとピュルケリはそれぞれ1782年、84年にすでに名門貴族に嫁いでいた〕。一行は1792年11月まで、ロンドンなどイギリスの幾つかの都市に滞在する。

この頃、フランスでは革命がさらに激化し、不穏な状況下にあった。1792年8月10日、民衆によるチュイルリー宮殿の襲撃事件が起こる。翌日、議会は王の職務停止を宣言し、封建制が完全に撤廃される。さらに9月には民衆がアベイ、カルム、シャトレなど牢獄に押しかけ、そこに収容されていた反革命容疑者を虐殺するという「9月の大虐殺」が起こる。イギリスにいるオルレアン公の娘アデライドやジャンリス夫人も亡命者リストに載る危険性があった。リストに載ると、反革命分子として財産の没収、親族の投獄という厳しい罰則が科せられることになる。それを恐れたオルレアン公がジャンリス夫人に即刻帰国するよう催促した。彼女は慎重な態度を崩さず、結局、子どもたちを連れてフランスに帰国したのは、その2ヶ月後の11月20日であった。彼女は養育掛を辞してアデライドをオルレアン公に渡すと、翌日にはイギリスに戻るつもりであった。しかし、アデライドの名がすでに亡命者リストに載ってしまったので、危険を感じたオルレアン公の強い要請で、ジャンリス夫人はアデライドを連れてベルギーのトゥルネに向かう。

---

<sup>34</sup> ジャンリス夫人がオルレアン公擁立に反対したのは、ラクロと対立関係にあったこと、またオルレアン公が摂政になっても、オルレアン家が王位を継承するわけではなく、むしろ息子のルイ・フィリップをルイ16世の養子にして王位を継がせることを考えていたようだ(Cf. Gabriel de Broglie, *op.cit.*, pp.216-217)。

### 3. 亡命生活

1793年1月14日、国王の死刑に関して国民公会で議決が取られ、死刑判決が下される。この時、ジャンリス伯爵は反対票を入れたが、当時「フィリップ・平等」と名乗っていたオルレアン公は賛成票を投じ、物議を醸す。そして、ルイ16世がギロチンにかけられたのは1月21日であった。93年はジャコバン独裁の年で、急進人民主義者ロベスピエールが反革命分子の徹底的な監視と弾圧、処刑を行っていた。

こうした状況下で王族の娘を連れて逃げるのは、ジャンリス夫人にとって非常に危険であった。4月4日、アデライドを兄のルイ・フィリップに預けてスイスに逃亡を図るが、ルイ・フィリップが無理やり妹を同行させる<sup>35</sup>。ジャンリス夫人の一行は5月にはドイツを経由してスイスに到着する。彼女は行く先々で様々な迫害を受けたばかりか、金銭的にも困窮する中で、子どもたちを伴って逃避行を続けた。スイスのブレムガルテンでは、モンテスキュー将軍の計らいで、サント=クレール修道院に匿われ、彼女たちは一時平穏な生活を送ることができた。しかし、それも束の間のことであった。10月31日にはジャンリス伯爵が反革命分子として処刑され、オルレアン公自身も、息子のルイ・フィリップがデュムーリエの裏切り<sup>36</sup>に加担した容疑で、11月6日に処刑される。ジャンリス夫人は夫とオルレアン公の処刑の知らせを聞いて、ショックのあまり一時生命が危ぶまれるほどの重病に陥る。

1794年5月12日、スイスのフリブルクに亡命していたアデライドの叔母コンティ大公妃が姪を引き取ることになる。ジャンリス夫人はアデライドと別れて、娘婿（次女ピュルケリの夫）ヴァランス将軍のいるオランダに向かう。5週間オランダに滞在した後、彼女はドイツに向かい、アルトナ〔ハンブルクの西の都市で、現在はハン

<sup>35</sup> ジャンリス夫人はアデライドを連れての逃避行では捕まる危険が高く、捕まれば間違いなく全員ギロチン送りになる。それよりも自分が去った後、アデライドが自ら出頭すれば国外追放になるだけですむだろうとルイ・フィリップに主張し、アデライドを置いてトゥルネを出発しようとした。その時の様子を彼女は『回想録』の中で次のように書いている。「しかし、私が馬車にちょうど乗り込もうとした時、シャルトル公が涙にかきくれる妹を腕に抱えて戻ってきた。私は彼女を馬車の私の横に座らせ、すぐに出発した。あまりに大急ぎで出発したので、オルレアン嬢も私も彼女の身の回りの品を持っていくことすら忘れていた」(*Mémoires de Madame de Genlis*, p.304)。

<sup>36</sup> デュムーリエはジロンド派内閣の元陸軍大臣で、当時ルイ・フィリップの上官であった。ベルギーを占領した彼は、1793年2月にオランダに侵攻。オーストリア軍に敗北した後、その司令官コーブルクと取引してベルギーを明け渡し、パリに進撃して武力で国民公会を解散して王制を再建しようと考えた。そして自分を罷免するために派遣された国民公会の委員を逮捕すると、オーストリア軍に引き渡した。部下の軍隊に攻撃されると、彼はオーストリア陣営に逃げ込み、フランス側から「裏切り者」として糾弾されることになった。

ブルク市の一部となっている]ではアイルランド人のミス・クラークと名乗って隠れ住む。そこでロベスピエールの処刑と、投獄されていた娘のピュルケリの釈放の知らせを受ける。安堵した彼女は1795年4月17日から本名を名乗るようになり、ハンブルクやベルリンなどドイツの諸都市を転々とする。

金銭的に逼迫した彼女は生活費を稼ぐべく、著作を次々に出版する。すでに1794年に4巻本の歴史小説『白鳥の騎士またはシャルルマーニュの宮廷』をオランダで出版し、大成功を収めていた。この小説は後にウォルター・スコットの先駆けとみなされ、スタンダールも評価しているものだ<sup>37</sup>。1798年8月には4巻本の小説『小さな亡命者たち』と『無謀な願い』を出版し、翌年にはベルリンで『旅行者ガイド』など次々に著作を出している。特に『旅行者ガイド』はドイツにおけるフランス人に向けたドイツ案内と、フランスにおけるドイツ人に向けたフランス案内を兼ね、言わば、現在のミシュランのような旅行ガイドブックのルーツを成している。このガイドはドイツで非常に人気を博した。彼女は革命を契機に、自らのペンで生計を立てる職業作家への変貌を遂げたことになる。女性の職業作家の誕生である。

#### 4. フランス帰国とナポレオンとの関係

1799年11月9日、ブリュメール18日のクーデタによって、ナポレオンが総裁政府を倒し、執政政府を樹立して自らが第一執政となる。5年後の1804年には皇帝の地位に就き、第一帝政が始まる。ジャンリス夫人の次女ピュルケリと叔母のモンテッソン夫人がナポレオンの妻ジョゼフィーヌと仲が良かったため、ジャンリス夫人はジョゼフィーヌの取りなしでパリへの帰国を許された。

1800年7月初旬、彼女は9年ぶりにパリの地を踏む。しかし、アンシャン・レジーム下の洗練された貴族社会を知っている彼女にとって、9年ぶりのパリ社会は言葉づかいや表現の誤り、礼儀作法の変質が眼につき、特に成り上がりのブルジョワ階級の台頭に失望を味わう。それ以降、社交界から距離を置き、文筆業に専念するようになる。

1802年にはナポレオンのおかげで、アルスナル図書館の一角にある快適な住まいに身を落ち着けることができた。彼女はそこでサロンを開き、外交官のタレイランを初め、フランス内外の多くの著名人を集めた。1804年以降は、ナポレオンから6000

---

<sup>37</sup> Cf. Gabriel de Broglie, *op.cit.*, p.273.

フラン [現在の日本円で 600 万円相当] の年金を受け取るようになる。彼女は年金と引き換えに、ナポレオンに文学、宗教、道徳に関する報告書を定期的を送ることになった<sup>38</sup>。当時、ナポレオンは様々な方面で情報収集に努めていたが、ジャンリス夫人もその情報源の一つであった。

「女は子どもを産むために男に与えられたもので、「男の所有物」<sup>39</sup>と断言するナポレオンの女性蔑視は有名で、彼は特に知的な女性への嫌悪を露わにした。実際、彼と対立したスタール夫人（図版 11 参照）を 1803 年に国外追放にしている。

スタール夫人の小説『デルフィーヌ』に見出せるカトリック批判 [主人公がプロテスタントであることや、とりわけ離婚を認めないカトリック倫理を批判したこと]と自立

した女性が自らの幸福を追求するテーマは、カトリック教を復活させ、民法典で妻の夫への服従を明文化したナポレオン体制を告発するものであった。それがナポレオンの怒りを買った理由の一つである。

一方、ジャンリス夫人に対してナポレオンが一定の好意を示したのは、18 世紀の宮廷生活を物語る彼女の軽妙な語り口に、彼が惹かれたためであった。ジャンリス夫人の方も、ナポレオンが宗教を復活させ「偽りの哲学を打ち倒した<sup>40</sup>」と、彼を評価している。要するに、彼女の保守性はナポレオンの信条と合致していた。

ジャンリス夫人の姪のジョルジェット・デュクレストがスタール夫人とジャンリス夫人を比較して、「前者はその作品において、男の持つあらゆるエネルギーと哲学を擁していたが、後者は女性特有の優雅さと自然な感受性を持っていた<sup>41</sup>」と語っ



図版 11 スタール夫人

<sup>38</sup> ジャンリス夫人は『回想録』の中で次のように述べている。「しばらくしてラヴァレット氏から手紙が届き、後の皇帝、第一執政官が私に政治、金融、文学、道徳や私の頭をよぎるあらゆる事柄について 2 週間ごとに手紙を書くことを望んでいるとのことだった。私はナポレオンに 2 週間ごとに手紙を送ることも、政治、金融について書くことも決してなかった。ほぼ毎月手紙を送ったが、宗教と道徳、文学と前世紀の哲学についてしか語らなかった (Cité par Alice M. Laborde, *op.cit.* p.54)。

<sup>39</sup> アラン・ドゥコー『フランス女性の歴史 4 目覚める女たち』、山方達雄訳、大修館書店、東京、1981 年、36 頁。

<sup>40</sup> *Mémoires de Madame de Genlis*, p.338.

<sup>41</sup> Georgette Ducrest, *Mémoires sur l'impératrice Joséphine ses Contemporains, la cour de Navarre et de la Malmaison*, 1828, cité par Gabriel de Broglie, *op.cit.*, p.365.

ている。ナポレオン自身、「男女は、女々しい男と同様に嫌いだ<sup>42</sup>」と断言している。

「自由」を称揚し、積極的に政治的発言を繰り返すスタール夫人は、女性の領域を越えて男性の領域に踏み込んだため、ナポレオンから敵視された。一方、ジャンリス夫人の方は、いわゆる「女らしさ」の領域に踏みとどまっていたため、ナポレオンの不興を買うことはなかった。彼はさらに、ジャンリス夫人が構想していた民衆のための授業料無料の学校の建設計画にも賛同の意を示し、彼女を教育視察官に任命するほどであった。しかし、彼女と直接会うことは一度もなく、そこに女性全体に対するナポレオンの根強い不信感が垣間見える。

## 5. ジャンリス夫人とスタール夫人

アルスナルに身を落ち着けて以来 10 年間、ジャンリス夫人は小説やエッセーを次々に出版し、本の売れ行きも良かった。その主な作品には、『クレルモン嬢』(1802)、『アルフォンシーヌ』(1806)、『アルフォンス』(1809)、『ラ・ヴァリエール伯爵夫人』(1804)、『マントノン夫人』(1806)などの歴史小説がある。最後の 2 作は太陽王ルイ 14 世とその時代を称えるもので、当時の人々に 17 世紀へのノスタルジーと熱狂を掻き立てた。『ラ・ヴァリエール伯爵夫人』に関しては、ナポレオンが特に気に入り、本から離れることができずに一気に読んで涙を流したという。

この間、彼女の過去の著作のほとんどが再版され、文学者としての盛名は高まり、スタール夫人を凌ぐほどであった。当時、二人の女性作家は知名度、社会的・政治的影響力、文学的評価において対等のライヴァルとみなされ、両者を比較対照して論じることが批評家の常であった<sup>43</sup>。

ジャンリス夫人はスタール夫人をライヴァル視し、彼女の作品の女主人公デルフィーヌやコリンヌの言葉づかいの不作法さを指摘したばかりか、離婚制度を擁護する作中人物の言説に異議を唱えた。また、スタール夫人が作中で自殺を擁護したことにも、激しく反発している。ジャンリス夫人は彼女が信条とする「道徳と宗教を [スタール夫人が] その作品の中で公然と攻撃した<sup>44</sup>」とみなし、彼女への批判を強め

<sup>42</sup> *Ibid.*, p.370.

<sup>43</sup> Cf. Anna Nikliborc, « Histoire d'une animosité littéraire : M<sup>me</sup> de Genlis contre M<sup>me</sup> de Staël », in *Acta Universitatis Wratislaviensis*, No 59, 1963.

<sup>44</sup> Madame de Genlis, *Mémoires*, t.V, p.346, cité par Daniel Zanone, « Morale de la mémoire (sur les *Mémoires* de M<sup>me</sup> de Genlis) », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*, p.197.



た。ジャンリス夫人の小説『女哲学者』(1804)では、スタール夫人をモデルにした女主人公ジェルトリュード[名前自体がスタール夫人の名前ジェルメーヌを彷彿とさせる]を登場させ、その大げさで気取った口調を揶揄した<sup>45</sup>。後の『回想録』(1825)の中では、『ドイツ論』(1810)の作者の優れた精神を認めているものの、その一方で、16歳のネッケル嬢[スタール夫人はルイ16世の財務総監ネッケルの娘]に初めて出会った時の様子を次のように描写している。

彼女はその頃からすでに非常な才能を予感させた。しかし、不安を抱かせるほどの活発さを見せていた。[...]彼女は私に異常なほどの友愛の念を示した。その情熱的な感情表現にはいつも誇張があったが、偽りのものでは決してなかった。[...]彼女のことを考えるとしばしば、彼女が私の娘または生徒でなかったことを心から残念に思ったものだ。私なら彼女に文学の正しい方針、公平な考えと気取りのなさを教えることができたであろう。このような教育を受けたならば、才能と寛容な魂を持つ彼女は申し分のない人間となり、私たちの時代でもっとも有名になって当然の女流作家になったであろう<sup>46</sup>。

このように、彼女は20歳年下のスタール夫人を権威主義的な教育者の視線でしか見ていなかった。一方、スタール夫人の方はジャンリス夫人への礼儀正しい態度を失わず、彼女への反論を試みることはなかった。ガブリエル・ド・ブログリは二人の女性作家を比較し、ジャンリス夫人はクリエイティブな想像力に欠け、文学的・芸術的な創造よりはむしろ、「道徳的目的性と教訓的な有益性」を追求したのに対し、スタール夫人は「天才的な人物で、その創造活動自体が十分な目的を持ちえた」としている<sup>47</sup>。

スタール夫人は『文学論』と『ドイツ論』において、従来のフランス中心の考え方を脱し、イギリス、ドイツなど「北方の文学」を評価して、魂の無限の解放を求める「熱情(アントウジアスム)」を称揚することで、ロマン主義運動の先駆者となる。彼女は『ドイツ論』の中で「趣味(goût)」と「天分(génie)」を対立させ、次のように述べている。

文学における趣味とは、社交界での上品さのようなもので、財産とか出自、あるいは

<sup>45</sup> 『女哲学者』におけるスタール夫人批判に関しては、Machteld De Poortere, *Les idées philosophiques et littéraires de Mme de Staël et de Mme de Genlis*, Peter Lang, New York, 2004, pp.100-104 を参照のこと。

<sup>46</sup> Madame de Genlis, *Mémoires*, t.V, cité par Daniel Zanone, *op.cit.*, p.198.

<sup>47</sup> Gabriel de Broglie, *op.cit.*, p.373.

は少なくともこの両方に伴う習慣の証だと見なされている。ところが天分は、育ちのよい人々とのつきあいのない職人の頭にも芽生える可能性がある<sup>48</sup>。

ジャンリス夫人は 18 世紀の人間として「良い趣味(bon goût)」を何よりも優先し、混乱や無秩序を生みだしかねない想像力や情熱を否定した。一方、スタール夫人は天分に恵まれた女主人公を通して、因習に囚われた社会を告発している。

歴史的観点から見れば、二人の女性作家の思想の違いは、彼女たちが生きた歴史的動乱の時期（フランス革命からナポレオン帝政を経て王政復古に至る時期）を象徴するものであった。すなわち、19 世紀初めのフランスは、「過去へのノスタルジー」と「あらゆる領域における自由、変化、革命への欲求<sup>49</sup>」との間で引き裂かれていた。ジャンリス夫人はアンシャン・レジームの価値観である「秩序、宗教、伝統」を体現し、他方、スタール夫人は束縛を嫌い、「自由」を何よりも優先する新しい価値観を体現していた。

## 6. ジャンリス夫人とロマン主義作家

1812 年、ロシア遠征で敗北を喫したナポレオンは失脚し、1814 年にはルイ 16 世の弟プロヴァンス公が亡命先のイギリスから帰国し、ルイ 18 世として王位に就く。1815 年にエルバ島を脱出したナポレオンが権力の座に一時、返り咲くが、ワーテルローの戦いでイギリス、オランダ、プロイセンの連合軍に完敗する。ナポレオンの百日天下は終わりを告げ、王政復古が始まる。ブルボン家の復権と共に、ルイ・フィリップもフランスに帰国することになり、ジャンリス夫人は昔の教え子との関係を修復しようと努める。1814 年 5 月にはルイ・フィリップがジャンリス夫人宅を訪れ、財政的に困窮していた夫人を助けるために、1815 年以降、8000 フランの年金を彼女に支給することを決め、毎年 2000 フランずつ額を増やすことを約束している。

ジャンリス夫人は 1811 年以降、アルスナルの快適な住まいを追われ、住居を転々としていたが、それでもなお文学活動は精力的に続けていた。彼女が出版した著作の中でも、『バチュエカス族』(1816)は、何世紀もの間、文明から離れて、スペインのバチュエカスの谷間に隠れ住む一種族のユートピア的な社会[貨幣も所有も戦争も知らない平等で平和な生活を営む社会]を描いてベストセラーになる。この小説に大きな影

<sup>48</sup> スタール夫人 『ドイツ論 2』中村加津、大竹仁子訳、鳥影社、東京、2002 年、106 頁。

<sup>49</sup> Machteld De Poortere, *op.cit.*, p.2

響を受けた読者の一人が、ジョルジュ・サンドであった。彼女は16,7歳の頃、この小説を読み「社会主義的・民主主義的な最初の衝動<sup>50</sup>」を覚えたと言っている。さらにジャンリス夫人の小説『成り上がり者たち』(1819)は、スタンダールに『リュシアン・ルーヴェン』(1834-35)の着想をもたらした源の一つとみなされている<sup>51</sup>。スタンダールは、ジャンリス夫人の作品にしばしば批判的な態度を取ったものの、妹のポーリーヌには彼女の作品を読むよう勧めていた<sup>52</sup>。

このように、ジャンリス夫人は後のロマン主義世代に少なからず影響を与えた。一方、彼女自身はロマン主義運動には批判的で、1820年に『ラントレピッド(大胆不敵)』という文芸批評誌を創刊した折には、ラマルチーヌやユゴーを初め、ロマン派の詩人や作家に容赦ない批判を浴びせている。古典主義文学に傾倒する彼女にとって「明晰さ、自然らしさ、正確さ、優雅さ」が「良い文体に必要な特徴<sup>53</sup>」であり、その原則に欠けるロマン主義文学は彼女にとって「わけのわからない文章(galimatias)」に過ぎなかった<sup>54</sup>。

ロマン主義運動は古典主義の規範を打ち破り、自由で奔放な想像力に身を任せてインスピレーションによる創造とその独創性を謳った。一方、ジャンリス夫人にとって、文学の目的とは、「役に立つ道徳的教訓を与え」、「趣味人(homme de goût)と徳のある市民の賛同を得ること<sup>55</sup>」であった。そこに両者の大きな違いが見出せる。

## 7. 『回想録』の出版

ジャンリス夫人は、それまで書きためていた日記やメモをもとに1825年に10巻

<sup>50</sup> George Sand, *Œuvres autobiographiques*, Pléiade (Gallimard), t.I, Paris, 1970, p.629.

<sup>51</sup> Gabriel de Broglie, *op.cit.*, p.422.

<sup>52</sup> スタンダールは妹への推薦図書として、ジャンリス夫人の *L'Enthousiasme et les vœux téméraires* と *Mlle de Clermont* を挙げている (Stendhal, *Correspondance*, Gallimard, t.I, Paris, 1962, p.293)。

<sup>53</sup> Madame de Genlis, *Mémoires*, t. VIII, cité par Alice M. Laborde, *op.cit.*, p.92.

<sup>54</sup> ジャンリス夫人は、1826年にアナトール・モンテスキューに宛てた手紙の中で、ロマン主義運動を迷路に喩えて次のように言っている。「昨日初めて家の周りの庭園を散歩しました。それが素晴らしいということを聞いたからです。でもぞっとするような迷路で、幻想も喜びも味あわずに迷ってしまいました。出口に通じる戸が見つかってやっと、喜びを感じたのです。この迷路はロマン派に似ています。[...] ロマン派の作品は全く理解できず、心残りなくそこから去ることができます。後には退屈と混乱、無秩序しか残りません」(Cité par Machteld De Poortere, *op.cit.*, p.68)。

<sup>55</sup> Madame de Genlis, *Adèle et Théodore, ou lettres sur l'éducation, contenant tous les principes relatifs aux trois différents plans d'éducation des Princes et des jeunes personnes de l'un et l'autre sexe*, Presses Universitaires de Rennes, Rennes, 2006, p.308.

本の『回想録』を出版する。回想録は、ルソーの『告白』やシャトブリアンの『墓の彼方からの回想』のように死後出版を前提に執筆し、作者の生前に出版する例は皆無であった。ジャンリス夫人は『回想録』の序文で、「生前に自らの回想録を出版するという有益な例をもたらした最初の作家であること<sup>56</sup>」を誇りにしている。彼女は存命中の人物でも実名で挙げ、生前の出版によって作者の責任を引き受けることで、回想録の信憑性を保証しようとした。それは当然のことながら、オルレアン家を筆頭に周囲の者たちの激しい反発を引き起こすことになる。

現代の視点から見れば、アンシャン・レジーム下の貴族社会から革命の動乱と亡命時代を経て、ナポレオン帝政から王政復古にいたる歴史を生きた当事者として、様々な著名人との交流や社会風俗を活写する彼女の著作は、非常に興味深い文献となっている。ただし、事実と反する不正確な言説が散りばめられ、彼女にとって都合の悪い事実(特にオルレアン公との恋愛関係など)には全く言及されず、『回想録』は歴史的資料としては信憑性に欠けている<sup>57</sup>。しかし、ジャンリス夫人は「同じ熱狂、同じ感動を分かち合った一つの世代の代弁者」であり、「感性の歴史家<sup>58</sup>」にとっては、豊富な資料を提供している。



ジャンリス夫人は1830年の7月革命にも立ち会ったが、彼女の教え子オルレアン公ルイ・フィリップ(図版12参照)が王位に就くことには反対であった。彼女は次のように述べている。

彼[ルイ・フィリップ]は王座を持ちこたえるには弱すぎます。[...]家庭の良い父親になる美德を全て持っていますが、[一国の]長に必要な性質は何も備わっていません。野心は皆無、断固とした性格の持ち主ではありません<sup>59</sup>。

しかし「フランス国王」ではなく、「フランス市民の

図版12 国王ルイ・フィリップ

<sup>56</sup> Madame de Genlis, *Mémoires*, t.I, p.vii, cité par Martine Reid, « *Ma vie littéraire* », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*, p.222.

<sup>57</sup> Marie-Emmanuelle Plagnol は『回想録』において、ジャンリス夫人が福音書的な原理に忠実な貴族の鑑としての自らの姿を作り出すために、事実を捻じ曲げて自らの思想や周囲の人物との関係を再構築していく過程を詳細に追っている(« *Les Mémoires de Mme de Genlis : apprentissage et reconstruction de l'histoire* », in *Histoires d'historiennes*, Université de Saint-Étienne, Saint-Étienne, 2006 )。

<sup>58</sup> Didier Masseur, Introduction de *Mémoires de Madame de Genlis*, p.30.

<sup>59</sup> Madame de Genlis, *Dernières lettres d'amour*, 1954, cité par Alice M. Laborde, *op.cit.*, pp.58-59.

王」を標榜するルイ・フィリップは、「家族・家庭 (Famille)」を基盤とするブルジョワ体制が確立した7月王政において、最も適した統治者であった。そもそも、フランス革命中に若きルイ・フィリップを民主主義へ傾倒させたのは、ジャンリス夫人のジャコバン教育によるものだ。彼に質素な生活を課し、「良い市民」になるための教育をしたのも彼女である。ルイ・フィリップ自ら、回想録の中で次のように述べている。

ジャンリス夫人は私たちが誠実で徳の高い共和主義者にした。それにも関わらず、虚栄心によって彼女は私たちが引き続き君主になるよう望んだ。この全てを両立させることは困難であった<sup>60</sup>。

したがって、彼女の薫陶を受けて育ったルイ・フィリップが絶対君主ではなく「市民の王」となったのも不思議ではない。1830年12月31日、ジャンリス夫人は84歳で死去し、国王ルイ・フィリップによって盛大な葬儀が執り行われた。彼女は教え子の治世を十分見ることなく、この世を去ったことになる。

## おわりに

1830年、84歳で亡くなったジャンリス夫人は、およそ140巻の著作と膨大な書簡、デッサンやグアッシュ [ 顔料をアラビアゴムで溶いた不透明な水彩絵の具 ] で描いた植物図鑑など様々なジャンルの作品を残した。

当時、彼女の名はヨーロッパ中に知れ渡っていたが、19世紀後半からは次第に忘れられていく。その理由としてまず挙げられるのは、フランス革命期に起った脱キリスト教現象が、時代を経るにつれ、文学において浸透していったことである。さらにテオフィル・ゴーチエが芸術の功利性を排し、芸術至上主義<sup>61</sup>を唱えることで、道徳的、教育的な有用性を目指したジャンリス夫人の文学は完全に否定されてしまった。19世紀後半の文学界では、彼女は子ども向けの本の作者として、またはアンシャン・レジーム下の貴族社会とフランス革命を生き延びた歴史の証人としてその名を

<sup>60</sup> *Mémoires de Louis-Philippe, duc d'Orléans*, cité par Machteld De Poortere, *op.cit.*, p.193.

<sup>61</sup> ゴーチエは『モーパン嬢』(1835)の序文で、「真に美しいものは何の役にも立たないものに限る。役に立つものは全て醜い」と述べ、芸術至上主義を標榜した (Théophile Gautier, *Préface de Mademoiselle de Maupin*, dans *Œuvres complètes, Romans, contes et nouvelles*, t.1, Honoré Champion, 2004, p.102 )

留めているに過ぎない。ランソンを初めとする文学史家や批評家も、スタール夫人やサンドには言及しても、ジャンリス夫人にはほとんど触れていない<sup>62</sup>。

フェミニズムの観点から見ても、ジョルジュ・サンドなどは、女性を家庭空間に閉じ込めようとする結婚制度に異議申し立てを行ったが、ジャンリス夫人は男性優位の社会によって定められた女性の運命を否定することはなかった。同時代のデピネ夫人と同様に、その著作は「礼節のしきたりに則り、男の文学者と競おうという野望は持たず、社会的に許された言説の一環をなす<sup>63</sup>」ものであった。しかし、それは単にジャンリス夫人の保守性だけではなく、時代の制約が大きかったためでもある。例えば彼女の著作『女流作家』(1802)が出版されたのは、ナポレオンがスタール夫人の『デルフィーヌ』に反発して、彼女にパリへの立ち入り禁止を命じた年にあたる。長い亡命生活を終えてやっとパリに戻って来たジャンリス夫人にとって、ナポレオンの機嫌を損ねるような小説は出せなかったはずだ。

彼女は『女流作家』では女性が作家となって公の空間で活躍することを批判したが<sup>64</sup>、1811年に出版された『フランス文学に対する女性の影響について』の序文では、次のように述べている。

どうして彼女たち [= 女性たち] が書くこと、作家になることが禁じられているのだろうか。こうした野心に反対するあらゆる理屈を私はよく知っている。私自身もかつて、正義感を抱いてその理屈を述べ立てたが、その正義感はしばしば公平さの度を越すものであった。今や生涯の終わりにきて、その点に関して私はもっと自由に話すことができる<sup>65</sup>。

<sup>62</sup> マルチヌ・リードはその理由として次の4点を挙げている。男性中心の文学史において女性作家がもともと低い地位にあったこと。ジャンリス夫人の作品は18世紀と19世紀の2つの世紀をまたいでいるため、フランス革命前と革命後を区別して論じる批評家にとって都合が悪かった。ジャンリス夫人の著作の膨大な数と「百科全書的」に広がるジャンルの多様さが批評の支障となった。ジャンリス夫人は宗教と王政を支持し、古典主義を信奉したのに対し、フィロゾフ派でロマン主義の先駆者となるスタール夫人の方が、イデオロギー的にも美学的にも近代的とみなされた(Martine Reid, Avant-propos de *Madame de Genlis. Littérature et éducation*, pp.11-14)。

<sup>63</sup> Isabelle Brouard-Arends, « Trajectoires de femmes, éthique et projet auctorial, M<sup>me</sup> de Lambert, M<sup>me</sup> d'Épinay, M<sup>me</sup> de Genlis », in *Dix-huitième siècle*, n° 36, 2004, p.196.

<sup>64</sup> 『女流作家』にはドロテとナタリーという二人の姉妹が登場する。姉の忠告を聞かずに作家となって世間の注目を浴びた妹のナタリーは恋人にも去られ、不幸な人生を歩む。一方、「慎み深さ」と「羞恥心」を尊び、家庭に留まったドロテは幸福な人生を送る。

<sup>65</sup> Madame de Genlis, *De l'influence des femmes sur la littérature française, comme protectrices des lettres et comme auteurs ; ou précis de l'histoire des femmes françaises les plus célèbres*, Maradan, Paris, 1811, p.xxxij. 下線引用者。

彼女がそこで「自由に」話したのが、セヴィニエ夫人の書簡、ラファイエット夫人の『クレヴの奥方』やコタン夫人の著作の方が、マリヴォーやアベ・プレヴォーなど著名な男性作家の作品よりもはるかに優れているということであった<sup>66</sup>。それは、女性の知的優位性を宣言するに等しかった。

これまで、ジャンリス夫人のこうした革新的な側面が見逃されてきたように思える。また、ジャンリス夫人は貴族の女性の趣味としての文学活動から、筆一本で生計を立てる職業作家への道に進んだ。彼女が職業作家に変貌したのは、確かに彼女の意志によるのではなく、フランス革命という時代の大きな変動によって余儀なくされたものであった。しかし、ジャンリス夫人がジョルジュ・サンドに影響を与えたように、7月革命後に登場する自立した女性作家たちの先駆者として彼女が果たした役割は大きい。

現在、手に入るジャンリス夫人の作品はまだ数少ないが、2006年に『アデルとテオドール』<sup>66</sup>、2007年に『女流作家』が復刊され、2007年にジャンリス夫人に関するシンポジウムが開催されるなど、フランスでは最近、彼女の再評価が始まっている。今後は、ジャンリス夫人の「本音」と「建前」、その革新性と保守性を考慮に入れ、彼女の著作の中でその行間から「本音」を読み取る作業が必要となろう。

## 【参考文献】

### 1. ジャンリス夫人の著作

Madame de Genlis, *Adèle et Théodore ou lettres sur l'éducation, contenant tous les principes relatifs aux trois différents plans d'éducation des Princes et des jeunes personnes de l'un et l'autre sexe*, 3 vol, Lambert, Paris, 1785 / Presses Universitaires de Rennes, Rennes, 2006.

: *De l'influence des femmes sur la littérature française, comme protectrices des lettres et comme auteurs ; ou précis de l'histoire des femmes françaises les plus célèbres*, Maradan, Paris, 1811.

: *Inès de Castro*, Ombres, Toulouse, 1995.

: *La Femme auteur*, Folio (Gallimard), Paris, 2007.

: *Les Chevaliers du Cygne, ou la cour de Charlemagne, conte historique et moral, pour*

---

<sup>66</sup> *Ibid.*, p.xv.

*servir de suite aux Veillées du Château, et dont tous les traits qui peuvent faire allusion à la révolution française, sont tirés de l'Histoire*, 3 vol, Lenierre (Paris) / Fauche (Hambourg), 1795.

: *Mademoiselle de Clermont*, dans *Romans de femmes du XVIII<sup>e</sup> siècle*, Bouquins (Robert Laffont), Paris, 1996.

: *Mémoires de Madame de Genlis*, Mercure de France, Paris, 2004.

## 2 . 研究書、研究論文など

Bessire (François), « M<sup>me</sup> de Genlis ou l'« ennemie de la philosophie moderne » », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*, Publications des Universités de Rouen et du Havre, Rouen, 2008.

Bordonove (Georges), *Louis-Philippe 1830-1848. Roi des Français*, Pygmalion, 2009.

Brogie (Gabriel de), *Madame de Genlis*, Perrin, Paris, 1985.

Brouard-Arends (Isabelle), « Soumission et indépendance : la dynamique intertextuelle à l'égard de l'Émile dans *Adèle et Théodore* de madame de Genlis », in *Études Jean-Jacques Rousseau*, n° 9, 1997.

: « Trajectoire de femmes, éthique et projet auctorial, M<sup>me</sup> de Lambert, M<sup>me</sup> d'Épinay, M<sup>me</sup> de Genlis », *Dix-huitième siècle*, n° 36, 2004.

: Introduction d'*Adèle et Théodore ou lettres sur l'éducation*, Presses Universitaires de Rennes, Rennes, 2006.

: « Les jeux intertextuels dans *Adèle et Théodore* : le discours éducatif entre contrainte et liberté », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.

Brucker (Nicolas), « Éducation et religion dans l'œuvre de M<sup>me</sup> de Genlis », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.

Charles (Shelly), « M<sup>me</sup> de Genlis et le dilemme du roman », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.

Craveri (Benedetta), « M<sup>me</sup> de Genlis et la transmission d'un savoir-vivre », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.

Diaconoff (Suellen), « Feminized Virtue: Politics and Poetics of a New Pedagogy for Women », in *Papers on French Seventeenth-Century Literature*, n° 46, 1997.

Didier (Béatrice), « Mémoires et autobiographie chez M<sup>me</sup> de Genlis », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.

Dow (Gillian), « On reviewing Mme de Genlis », in *SVEC*, 2004-7.

: « « The best system of education ever published in France » : *Adelaïde and Theodore* en Angleterre », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.

Gautier (Théophile), Préface de *Mademoiselle de Maupin*, dans *Œuvres complètes, Romans*,



- contes et nouvelles*, t.1, Honoré Champion, 2004.
- Grosperin (Bernard), « Un manuel d'éducation noble. *Adèle et Théodore* de Madame de Genlis », in *Cahiers d'histoire*, n° 19, 1974.
- Hugo (Victor), *Choses vues*, dans *Histoire, Œuvres complètes*, Bouquins (Robert Laffont), Paris, 1987.
- Laborde (Alice M.), *L'Œuvre de Madame de Genlis*, Nizet, Paris, 1966.
- Louichon (Brigitte), « M<sup>me</sup> de Genlis : homme de lettres et grand-mère », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.
- Marcoin (Francis), « *Les Petits Émigrés*, entre Lumières et romantisme », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.
- Martin (Christophe), « Sur l'éducation négative chez M<sup>me</sup> de Genlis (*Adèle et Théodore, Zélie ou l'Ingénue*) », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.
- Masseau (Didier), Introduction de *Mémoires de Madame de Genlis*, Mercure de France, Paris, 2004.
- : « Pouvoir éducatif et vertige de la programmation dans *Adèle et Théodore* et quelques autres ouvrages », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.
- Mistacco (Vicki), « Genlis à contre-courant : *De l'influence des femmes* », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.
- Nikliborc (Anna), « Histoire d'une animosité littéraire : M<sup>me</sup> de Genlis contre M<sup>me</sup> de Staël », in *Acta Universitatis Wratislaviensis*, No 59, 1963.
- Pellegrin (Nicole), « Une pratique féminine de l'histoire : quelques remarques sur le cas de M<sup>me</sup> de Genlis », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.
- Plagnol-Diéval (Marie-Emmanuelle), « Le théâtre de M<sup>me</sup> de Genlis. Une morale chrétienne sécularisée », in *Dix-huitième siècle*, n° 24, 1992.
- : *Bibliographie des écrivains français : Madame de Genlis*, Memini, Paris, 1996.
- : « La presse contemporaine et l'œuvre romanesque de madame de Genlis », in *Journalisme et fiction au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Peter Lang, New York, 1999.
- : « Aimer ou haïr Madame de Genlis », in *Portraits de femmes*, Université de Bruxelles, Bruxelles, 2000.
- : « Entre fête vertueuse et fête mondaine : le théâtre de Madame de Genlis », in *Fête et imagination dans la littérature du XVI<sup>e</sup> au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Université de Provence, Aix-en-Provence, 2004
- : « Les *Mémoires* de Mme de Genlis : apprentissage et reconstruction de l'histoire », in *Histoires d'historiennes*, Université de Saint-Étienne, Saint-Étienne, 2006.
- Poortere (Machteld De), *Les idées philosophiques et littéraires de Mme de Staël et de Mme de Genlis*, Peter Lang, New York, 2004.

- Reid (Martine), *Présentation de La Femme auteur*, Folio (Gallimard), Paris, 2007.
- : Avant-propos et « *Ma vie littéraire* » in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.
- Rousseau (Jean-Jacques), *Émile, Œuvre complètes*, t. IV, Pléiade (Gallimard), Paris, 1969.
- ルソー 『エミール』、樋口謹一訳、3巻、白水社、東京、1986年。
- Sainte-Beuve (C.-A.), *Causeries du lundi*, t.3, Garnier Frères, Paris, 1859.
- Sand (George), *Œuvres autobiographiques*, 2 vol, Pléiade (Gallimard), Paris, 1970.
- Schlick (Yaël), « Beyond the boundaries : Staël, Genlis, and the impossible "femme célèbre" », in *Symposium*, n° 50-1, Spring, 1996.
- Stendhal, *Correspondance*, Gallimard, t.I, Paris, 1962.
- Strien-Charbonneau (Madeleine), « Madame de Genlis et le roman historique », in *Histoire, jeu, science dans l'aire de la littérature*, Rodopi, Amsterdam, 2000.
- Trousson (Raymond), Introduction de *Mademoiselle de Clermont*, dans *Romans de femmes du XVIII<sup>e</sup> siècle*, Bouquins (Robert Laffont), Paris, 1996.
- Zanone (Damien), « Madame de Genlis romancière : à propos des *Parvenus* », in *Repenser la Restauration*, Nouveau Monde, Paris, 2005.
- : « Morale de la mémoire (sur les *Mémoires* de M<sup>me</sup> de Genlis) », in *Madame de Genlis. Littérature et éducation*.

- 赤木昭三、赤木富美子、『サロンの思想史 デカルトから啓蒙思想へ』、名古屋大学出版会、名古屋、2003年。
- ゴンクール兄弟(エドモン・ド/ジュール・ド)、『ゴンクール兄弟の見た18世紀の女性』、鈴木豊訳、平凡社、東京、1994年。
- 佐藤夏生、『スタール夫人』、清水書院、東京、2005年。
- 芝生瑞和編、『図説フランス革命』、河出書房新社、東京、1989年。
- スタール夫人、『ドイツ論』1~3巻、中村加津、大竹仁子訳、鳥影社、東京、2002年。
- ドゥコー(アラン)、『フランス女性の歴史3 革命下の女たち』、渡辺高明訳、大修館、東京、1987年。
- 『フランス女性の歴史4 目覚める女たち』、山方達雄訳、大修館、東京、1981年。
- 水田珠枝、『女性解放思想史』、ちくま学芸文庫、東京、1994年。

## Résumé

### La vie et les idées de Madame de Genlis

Kyoko MURATA

Au début du 19<sup>e</sup> siècle, deux femmes écrivains occupaient un rang égal dans la littérature française : Madame de Staël et Madame de Genlis. Cette dernière connut un

succès extraordinaire dans toute l'Europe. Mais maintenant, à la différence de Madame de Staël, elle est complètement oubliée dans l'Histoire. Nous nous proposons donc d'aborder la vie et les œuvres de Madame de Genlis pour mieux cerner ses idées pédagogiques et littéraires.

Caroline-Stéphanie-Félicité du Crest (1746-1830) est née au manoir de Champcéré : elle est issue d'une famille noble de Bourgogne. Enfant vive et intelligente, elle devient célèbre dans les salons comme harpiste de talent. Mariée à l'âge de 17 ans au comte de Genlis, elle se fait un nom par ses pièces de théâtre de société. En 1772, elle fait son entrée au Palais-Royal en tant que dame d'honneur de la duchesse de Chartres. Séduit par sa beauté, le duc de Chartres (le futur Philippe Égalité) en fait sa maîtresse ; d'où le règne de Madame de Genlis au Palais-Royal. En 1782, elle se voit accorder le titre de « Gouverneur » des enfants du Duc d'Orléans, dont le futur roi Louis-Philippe ; ce qui provoque un grand scandale dans le tout Paris. Retirée dans une maison de Bellechasse, elle se consacre à l'écriture, tout en élevant ses enfants et ceux du Duc d'Orléans. Disciple de Rousseau (non sans réserves), elle met en pratique la théorie pédagogique de ce dernier. Son roman, intitulé *Adèle et Théodore ou Lettres sur l'éducation*, publié en la même année, connaît un succès considérable.

La Révolution l'oblige à quitter la France pour l'Angleterre avec Adélaïde d'Orléans. En exil à partir de 1793, elle s'enfuit avec les enfants en Belgique, puis en Allemagne et en Suisse. D'autre part, le comte de Genlis, son mari, et le duc d'Orléans, son amant, sont condamnés à mort en 1793. Pendant son exil, Madame de Genlis gagne sa vie en publiant plusieurs œuvres, telles que romans, contes et nouvelles, manuels, et essais. Elle devient, là, un des prototypes de l'écrivain professionnel. De retour en France en 1800, elle s'installe dans un appartement de l'Arsenal grâce à la faveur de Napoléon, alors que Madame de Staël est expulsée du pays par ce dernier. Elle continue à publier des romans historiques et ses *Mémoires* en 10 volumes sortent en 1825. Elle meurt juste après la Révolution de Juillet, qui permet à son ancien élève Louis-Philippe de monter sur le trône.

En ce qui concerne ses idées, se mettant du côté des anti-Philosophes, elle représente le conservatisme qui respecte surtout la religion. Mais elle donne à Louis-Philippe une éducation encyclopédique et jacobine, c'est-à-dire une formation de prince démocrate. L'aristocrate du 18<sup>e</sup> siècle qu'est Madame de Genlis donne la priorité au bon goût et nie la force de l'imagination et de la passion qui risquent de causer désordre et trouble. C'est pour cette raison qu'elle critique Madame de Staël et le mouvement romantique. Mais elle n'exercera pas moins une grande influence sur les écrivains postérieurs dont Stendhal et George Sand.